

真邊 彩<sup>1</sup>: 報告—第13回国際花粉学会議／第9回国際古植物学会議合同大会 (IPC XIII/IOPC IX 2012)

Aya Manabe<sup>1</sup>: Report—The 13th International Palynological Congress /The 9th International Organization of Paleobotany Conference (IPC XIII/IOPC IX 2012)

2012年8月23日～30日の7日間にわたって、第13回国際花粉学会議と第9回国際古植物学会議の合同学会が東京都文京区中央大学後楽園キャンパスにて開催された。日本植生史学会が後援する8件のシンポジウムをはじめ、615におよぶ講演・口頭発表・ポスター発表がおこなわれた。ここでは、筆者が参加した公開シンポジウム『東アジア植物考古学の革新』と、シンポジウムセッション“Use and management of plant resources in East Asia”について概要を報告する。

公開シンポジウム『東アジア植物考古学の革新』は、小畑弘己氏と那須浩郎氏を中心に、主に先史時代における植物利用と稲作・雑穀作の起源と展開について日本・韓国・中国・ロシア沿海州といった東アジアの各地域をテーマとした発表がおこなわれた。各発表者とも、それぞれの調査・研究に基づく最新の成果を加えた報告であり、どのような視点から植物利用や栽培化を検証するかという点が発表者によって多岐にわたった。

那須氏は遺跡出土資料の解釈において問題となる、栽培種／野生種の栽培化症候群による形態学的変化と識別

点の問題を取り上げ、中国における野生イネの採集からイネ・雑穀類の栽培化過程に至るまでを通時的に検証した。Gyoung-Ah Lee氏は韓国における分析から、従来の稲作重視の動向ではなく、雑穀やマメ類といった他の栽培植物も含めたセット関係で議論することの重要性を指摘し、韓国新石器時代のマメ類栽培に関する最新の動向を取り上げた。小畑氏は、かつては稲作伝播の指標とされていたコクゾウムシ属甲虫を縄文時代の家屋害虫として位置づけ、近年の大陸系穀物の検出状況から縄文時代後期末にイネの伝来があった可能性を新たに提示した。佐々木由香氏は、日本では研究量が少ない草本植物に注目し、特にマメ類研究からみえた植物利用の実態について、縄文時代草創期から弥生時代前期にかけての列島全体の草本植物利用の推移を時期別に提示した。各植物を模式化してプロットした出土資料の変遷図は、縄文時代の種実利用を可視化したものとして、非常に分かりやすい。高宮広土氏は、これまで農耕の検証が困難であった琉球列島において、フローテーション法や炭素・窒素同位体比分析、レプリカ法が導入されたことで飛躍的な成果があったことを学史的に評価し、これ



図1 公開シンポジウム『東アジア植物考古学の革新』(提供: 工藤雄一郎氏)。



図2 シンポジウム・セッション “Use and management of plant resources in East Asia” (提供：吉川純子氏)。

らの分析法が奄美以南の地域における農耕論や食性研究に新たな見解をもたらしたとした。ロシア沿海州地域の植物利用については、小畑氏が自身の発掘調査の成果を交えて報告し、農耕と解釈されていた植物利用は耕作・園耕の段階にあたり、経済サイクルにおける穀物栽培の実態を検証した。

以上計6本の報告により、東アジアにおける植物考古学研究の今日の到達点と資料の評価、各地域における現状と課題がまとめられ、シンポジウム参加研究者にとっても現状に対する共通認識を持つ場となった。このように東アジア全体での植物考古学の最新情報が得られる貴重な場であったが、日本語での進行であったために海外からの聴衆が少なかったこと、また、学生の参加率が非常に低かったことが残念であった。

シンポジウム・セッション “Use and management of plant resources in East Asia” は、能城修一氏と工藤雄一郎氏がオーガナイザーとなり、9件の口頭発表と2件のポスター発表があった(図2, 3)。口頭発表では、能城氏がキーノートとして遺跡出土の木材や花粉、種実の同定成果を中心に日本における森林資源利用の事例を述べた。また縄文前期以降の漆工に使われたウルシについて中国東北部に起源するタイプに由来し、縄文時代前期あるいはそれ以前に持ち込まれた可能性を指摘した。大井信夫氏は花粉分析学の立場から、日本列島におけるブナ属・スギ属・常緑ブナ科などの変遷を9つの年代帯で区切って提示し、各植物における出現頻度と分布の変化を詳細なデータで図示し

た。工藤氏は、「土器はなぜ出現したか」という議論を念頭に、縄文時代草創期土器付着炭化物中の炭素・窒素同位体比分析の近年の成果を取り上げ、南九州地方の隆帯土器期の事例から、土器は調理加工における補助道具として様々な食料資源に対して使用された可能性が高いという土器出現期のあり方を提示した。渋谷綾子氏は東京都下宅部遺跡での縄文時代中期～晩期の土器付着炭化物の残留デンプン分析により、鱗茎や堅果類など複数のデンプン粒が検出されたことから、一つの土器で複数種の植物が調理された可能性を指摘した。今後は、工藤氏の分析結果との比較から新たな見解が得られることが期待される。小林和貴氏は、遺跡出土の編組製品の植物学的分析から、北陸・九州・関東地方における編組製品への利用素材についてまとめ、広葉樹・針葉樹・木本性つる植物・タケ類等を含む15種が確認されていることや各地域の様相を報告した。吉川昌伸氏(代理報告：能城氏)は、クリ花粉はクリ林周辺に集中するという実験結果を縄文時代集落周辺におけるクリ花粉のデータと対比し、縄文時代前期には管理栽培がおこなわれていた可能性を指摘した。吉川純子氏は、遺跡出土の炭化クリ子葉資料を計測し、縄文時代早期～後期にかけては変異幅が狭く、縄文晩期になると個体群間での変異が大きくなる傾向にあることを示した。また、遺跡立地で差異がでるかといった将来的な検討課題をまとめた。Dagfin Moe氏は、虫媒花のメドウスイートの花粉が遺跡出土の糞石や副葬品の土器内面から多量に検出されたことを受け、先史時代においてはちみつ酒が存在した可能性を指摘した。

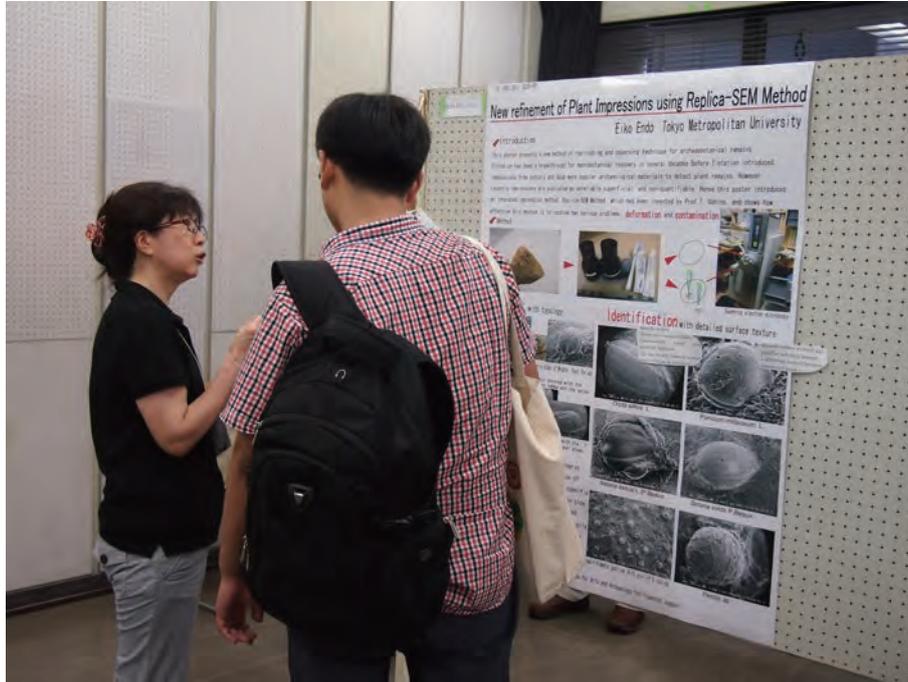


図3 ポスター発表で説明をしている遠藤英子氏（提供：工藤雄一郎氏）。

吉田明弘氏は、宮城県多賀城における高精度年代測定に基づく植生復元から、築城前は落葉広葉樹林であったところが、築城を境に伐採による草本植物が増え、二次林が増えるという築城前後による植生の変遷過程を提示した。また、森林伐採という人為的行為が周囲の沖積地形成にも影響を与えたとした。ポスター発表では、遠藤英子氏がレプリカ・SEM法による土器種実圧痕の分析について、植物遺存体研究としての有効性と利点を自身の調査事例と実際のレプリカを展示して報告した。Xue Shang氏は、陝西省のXiahe遺跡における花粉と種実分析から、中期完新世における当該地域の植生環境の復元と、仰韶文化期から龍山文化期にかけてのアワ・キビの出土状況やイネの導入期について考察したデータを提示した。

以上のように、このセッションでは植物学・花粉学・考古学の各分野からのアプローチにより、遺跡・遺物から引き出すことのできる情報について、最先端の事例研究成果が報告された。

植物学と考古学とが連携した研究が進み、植物利用の実態解明に向け考古学には様々な分析法が取り入れられており、論文数や分析報告数からみても近年の成果はめざましいものといえ、今回のIPC/IOPCにおいては、遺跡出土資料の分析法とその解釈のしかた、そして学融合的研究の重要性と意義が示されたのではないかと思う。

(〒891-0103 鹿児島市皇徳寺台5-25-13 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科)